福岡教育大学紀要，第50号，第２分冊，69―92（2001）

差別社会における自立支援―Booker T. Washingtonの再評価

Promoting Self-help Activities in the Segregated Society: Re-examining 'Booker T. Washington'

西　崎　　緑
Midori　Nishizaki

福祉社会教育講座

（平成12年９月８日受理）

Summary

The philosophy and its applications of Booker T. Washington, have been described as 1) positive contributions to the African-American society through his enthusiastic active support of industrial education, and at the same time, causing 2) negative effects on the Civil Rights Movement by his failures to criticize the Jim Crow system. This study, however, conclusively examines the general belief that his intentions were betrayed, conserving the racial relations and social systems of the Postbellum South. Washington clearly held complicated strategies to uplift the status of the blacks. In addition, Tuskegeean, his followers, succeeded in empowering the long-suffering Southern black farmers psychologically rather than economically.

はじめに

アメリカの社会福祉史において，19世紀後半は，専門的ソーシャルワークの誕生の時期として記録されている。この時期には，ヨーロッパ大陸からの移民が大量に流入し，とりわけ彼らの最初の居留地である大都市で，貧困問題と児童問題が顕著になった。これに対して，慈善組織協会（COS，1877年バッファローで創設），セツルメントハウス（1887年ニューヨークで創設），児童福祉改善運動(ニューヨークにおいて児童援助協会，児童虐待防止協会を母体として開始）の３つの社会運動が先駆的慈善活動を開始し（Lowe, 1999：10)，次第に他の都市にも広がっていった。専門的ソーシャルワーカーの養成は，1898年にニューヨーク慈善組織協会が全米初の研修会を開催したことに始まるが，1920年代までにソーシャルワークの対象となったのは，大都市の貧困者や児童に限られていた。これをはるかに上回る社会の底辺に存在する人々，すなわち農村部の貧困者，移動労働者，黒人，先住民，有色移民や混血者などについては，ほとんど何の救済も行われておらず，これがソーシャルワークの課題として俎上に上ることもなかった。このような「忘れ去られた人々」[1]に対しては，ニューディール期以後公的救済の手がさしのべられていくが，それまでの間，彼らがいかに生き延びたかを研究することは，社会福祉史の課題としていつかの時点で明らかにするべきことである。

本論では，その忘れられた人々のうち黒人をとりあげ，当時の黒人層が絶望的貧困状態から脱却する手段をどのように模索してきたかを見ていく。とりわけ，Tuskegee Normal *and* Industrial Institute（タスキギ教育・産業学院，Tuskegee Institute，以下「タスキギ学院」と記述）を中心に黒人による自己改良運動を展開した Booker Taliaferro Washington（以下「ワシントン」と記述）に焦点をあて，彼の思想と活動を検討する。ワシントンは19世紀末から20世紀初頭にかけて，南部黒人層の父親的存在として精神的リーダーの役割を果たし，ソーシャルワークの手が届かなかった黒人層の生活向上に大きな役割を果たしたとされてきた。また彼は，セオドール・ルーズベルト大統領やアンドリュー・カーネギーなどの政財界の主要人物と親交をもち，白人社会の権力者層の支持を受けつつ，彼らから「援助」という形の富を黒人社会に流し込む役割を果たしたとも言われる（McElroy, 1992：91）。

これに対して，ワシントンの存命中から，ワシントンの方法は，むしろ黒人を社会の底辺に閉じこめる役割を果たすものであるとの批判が寄せられてきた。このうち特に有名なのは，全米有色人向上協会（National Association for the Advancement of Colored People, NAACP）の指導者となった，アトランタ大学教授 W. E. B. Du Bois（以下，「デュボイス」と記述）との論争であった[2]。両者の最大の対立点は，黒人公民権問題であり，それと関連して黒人教育問題においても厳しい批判が行われた[3]。黒人の生活向上には，黒人全員に公民権を獲得させ，政治的に社会体制の変革を行うことが必要であると考えたデュボイスから見れば，白人優位の現体制を容認し，そのなかで漸次改善をめざすワシントンの方式は，真の問題解決を先送りするものでしかなかった。また，ワシントンの強調した職業教育も，体制変革がなければ単に白人による黒人搾取を強化するだけであるというのがデュボイスの見方であった（Kilson, 2000）。

二者の対立は，社会体制変革を行うのが先か，漸次社会改良を行いながら，個人に対しては，社会適応を促進させるのが先かという，社会福祉の位置づけや役割をめぐって古くから戦わされてきた議論を思い起こさせる。いわゆる社会福祉の実践活動の多くは後者の立場＝社会改良を基盤として発達してきたものであるが，共産主義者やソーシャルアクションを中心とした活動家からは常に批判の対象となってきた。しかしワシントン＝デュボイス論争と社会福祉の役割論争との間に見られるアナロジーは，別稿で検討すべき課題であると考えるので，ここでは，ワシントンが考え，実践しようとした漸次的改良策の全貌をとらえ，その仕組を理解することにとどめたい。

なお最近では，デュボイス＝ワシントン論争のようなステレオタイプのワシントン像に挑戦する意見も出ている。一つは，ワシントンには二面性があったとする歴史家の意見である。彼らによれば，ワシントンは，必ずしも公民権獲得運動に不熱心であったわけではなく，裏面では相当な政治活動を行っていた（Harlan, 1988：110）。したがってデュボイス＝ワシントン論争は，あくまでも表面上の強調点の違いのみであり，当時の黒人運動全体として見れば，同根補完関係にあったとする意見である。二つめは，60年代以後体制変革が中心となった黒人運動を批判し，ワシントンの強調した黒人自らの精神的・経済的自立を見直そうというものである（Steel, 1990）。彼らは，公民権を獲得し，affirmative action によって少数者や女性の地位改善が制度的に実行されてから約30年たった今も，なお黒人家庭が相対的貧困状態に置かれている事実を認め，黒人層の内在的要因の解決を早くから見抜いていたワシントンを再評価している。

本論の副題を再評価としたのは，これまで一般的に信じられてきたワシントンのイメー

ジ，すなわち白人に迎合した活動家というイメージを南北戦争後の黒人の生活実態と社会的環境という歴史的限界を踏まえて再評価する必要を認めたからである。当時の時代設定のなかで，ワシントンの選択肢の限界を考慮しつつ，彼が行き着いた自立支援活動が持つ意味と，抑圧された黒人層への実質的福祉効果について考察を行うこととする。

1．ワシントンの時代と人生

人間の思想や活動には，必ず時代的制約が伴う。ワシントンの思想や活動を正当に評価するためには，その前提としてのワシントンの生きた時代，特に黒人にとっての社会的環境を正しく理解することが必要である。さしあたって理解すべきは，19世紀末のアメリカの政治・経済・文化の地理的構図であり，北部（工業地帯），南部（農業地帯），西部（新興地帯）の三地域の人々の考え，生活様式，社会のシステムが各々大きく異なっていた点である。黒人に関して言えば，南北戦争以前には，総人口の90パーセントが南部に居住しており，そのほとんどが奴隷であった。ワシントンも多くの黒人と同様，南部奴隷として生まれ，解放後も死ぬまで南部に留まった。まず我々が留意しなければならない点は，彼の思想と活動が，「黒人が南部で生き残る」ことを中心に形成されたことである。

以下，ワシントンに影響を与えたと思われる南北戦争後の南部の社会状況と黒人の生活実態を，ワシントンの人生の形成過程と関連づけて考察することとする。

(1) 南北戦争後の南部

① 再建期（1865-1877）

【経済】：1865年，4年間にわたる南北戦争は，合衆国からの離脱を図った南軍の敗北に終わった。戦争末期には白人でさえ通常の生活レベルを維持することができなかった(Spencer, 1955：17)が，さらに白人農民の中には戦後もその疲弊から回復できず経済的に破綻した者も少なくなかった。南部経済が回復困難であったのは，主な戦場が南部であったために，農地やインフラストラクチャーが破壊されたこと，働き盛りの男子が戦時に死傷したこと，南軍政府発行の債権や紙幣が無効になったことによる損失などが原因として挙げられるが，より重要な要因としては，南部農業を支えてきた奴隷制度を新しい方式に変えることが困難であったこと，さらに北部ですでに進行していた工業化が南部では進まなかったことが挙げられる（Foner, 1991：921-923)。

北部の奴隷解放論者は，奴隷解放によって南部の大プランテーションが北部と同様の小農場自作農の耕作地に変わり，生産性が向上すると期待していた（Woodman, 1997：3)。しかし，実際には南部の土地はジョンソン大統領の政策などにより黒人には分割されず，結局，解放奴隷は，農業労働者（Sharecropper）や小作人（tenant）となって元のプランテーション経営者層に雇用される他なかった。但し，白人農業経営者や自作農が1873年恐慌以降綿花価格の暴落などにより破産や小作農に転落したのに比べ，南部再建期を通じて黒人は徐々に小作農や自作農を増やして若干の地位向上を成し遂げた。

【法制度】：南軍の敗北（1865年4月）により，奴隷解放宣言（1863）が適用され，長期にわたって抑圧されてきた黒人は，「自由人」の地位を獲得した。合衆国憲法修正13条「奴隷制度廃止」(1865)，修正14条「公民権付与」(1868)，修正15条「投票権付与」(1868）を通して，黒人にも白人と同等の社会的権利を付与する枠組ができた。南部は，この合衆国憲法修正条項を無視し，戦後も黒人排除規則（Black Codes）を何とか保持しようとした

が，連邦議会が議決した1867年の南部再建法（Reconstruction Act）によって，各州憲法に人種差別のない普通選挙制度の条項を入れるよう修正された[4]。これにより，南部再建期には「リンカーンの政党」である共和党が一気に南部各州の政権を獲得し，黒人の連邦上院議員も誕生するなど，黒人による活発な政治活動がみられた[5]。

今一つこの時期の制度的枠組として注目すべきは，連邦政府が初めて市民の福祉に直接関与した（Burton, 1993：146）ことである。連邦議会は，1865年3月難民・解放奴隷・遺棄地局（Bureau of Refugees, Freedmen, and Abandoned Lands）を創設し，南部の戦後復興にあたらせることとした。この機関の当初の目的は，難民に対しての食料や医療サービスの提供，解放奴隷のための教育，前プランテーション地域における自由労働契約制度の設立，黒人に対する正当な裁判受給権の保障などであった（Foner, 1991：420）。局長のハワード将軍は，解放奴隷をのべ85万エーカーにわたる北軍占拠地に定住させようとしたが，ジョンソン大統領の土地返却政策に阻まれて成功しなかった。その後，戦後改革の遅延にいらだつ北部の強い支援を受けた連邦議会は，南部やジョンソン大統領の反対を押し切って，1866年解放奴隷局（Freedmen's Bureau）法を成立させ，南部の改革を押し進めようとしたが，財政的裏付けと人的配置が不十分であったため，政策の実効性は限られた。解放奴隷局は，南部で学校，医療施設，農業援助機関などの建設・運営を行ったが，北部共和党が保守化し，連邦主導の南部改革への支援が薄れるにつれ，それらの事業を州政府に移管するよう政治的圧力が高まった。結局，連邦議会は早くも1869年に教育（1870年まで継続）と退役軍人に対しての援助（1872年まで継続）を残して解放奴隷局を閉鎖し，事業を各州政府に移管した。

【社会】：短命に終わった南部再建期であったが，黒人の生活に様々な不可逆的変化をもたらした。一つめは，南部共和党主導の新州政府と解放奴隷局によって進められた正当な労働契約や裁判の保障が，近代社会の市民として生きる基礎を黒人側に意識させたことである。二つめは，黒人たちが，奴隷時代には不可能であった，家族や親族関係を単位とした家庭生活を営み始めたことである。三つめは，黒人地域社会がキリスト教会を中心として統合され，黒人のアイデンティティ確立と地域社会の福祉活動に教会が大きな役割を果たすようになったことである。

このような新生活のスタートとともに，黒人社会のその後にとっておそらく一番大きな影響を与えたと思われるのが公教育の開始である。北軍の駐留と解放奴隷局の働きを背景に，学校建設が進み，解放奴隷の教育に使命を感じた教師や宣教師が北部から南部に続々と流入した[6]。また黒人側も教会や地域社会を通じて，学校建設と運営のために寄付や奉仕を募って，積極的に公教育を支援した（Burton, 1993：146）。

② 南北戦争後の南部——人種差別システムの復古（1877—）

南部黒人にとっての再建期は，奴隷から解放されたエネルギーに満ちあふれた時期であった。しかしそれは長続きしなかった。奴隷解放に結集した北部の熱がさめるにつれ，南部の旧支配層である差別主義者が復活し，連邦政府の再建政策と黒人社会に対する暴力的テロリズム攻撃が頻繁に起こるようになった。再建期に誕生した共和党政権で1876年まで残っていたのは，サウスキャロライナ，フロリダ，ルイジアナの3州のみであり（Foner, 1991：920），それも民主党単独支配の地域に変わるのに時間はかからなかった。

1877年の北軍の撤退とともに南部白人は再び南部の政権，経済，社会を完全に支配するようになり，再建期に黒人に付与された参政権，公平な労働契約と裁判，平等な社会参加のシステムを実質的に無効にしていった。それは1960年代まで続く公民権剥奪，農業をは

じめとする産業や社会生活における不当な取り扱い，さらにリンチ殺人が続く（Trotter, 1995：86）暗黒時代に入ったことを意味した。

(2) ワシントンの生い立ち

ワシントンは，1856年春頃ヴァージニア州フランクリン郡のジェームズ・ボローグズ農場の奴隷の子として生まれた（Harlan, 1972：3)。後に名著 *Up From Slavery* で本人が明らかにしているように，出生の年月は定かでなく，入学時の書類などから推測される出生時期も一環していない。ボローグズは，いわゆる自作農（yeoman）階級であり，商品作物生産を主とする大農場とは異なり，ワシントンを含めて10人の奴隷[7]と主人の家族がともに農場で働く小農であった。母親ジェーンは主家と奴隷の双方に料理を作るコックだったが，父親は白人で，主人であるとも近所の白人であるともいわれている。

奴隷解放から5ヶ月後の1865年8月，ジェーンは子どもたちを連れてウェストヴァージニア州カナワヴァレーの岩塩採掘場に仕事に出ていた夫，ワシントン・ファーガソンのもとに移り住んだ（Harlan, 1988：25)。9歳のワシントンは岩塩採掘場や炭坑で働かされたが，賃金はすべてファーガソンに取り上げられていた。しかし重労働から開放される時は，以外に早くやってくる。1867年[8]にワシントンは，地元の富豪ラフナー家にハウスボーイとして雇われ，やがて移り住むようになる。従って彼の実生活は，決して *Up From Slavery* に記述されたような過酷なものではなく，その後も南部再建期の恩恵を十分に受けることになる。

この時期にワシントンは，その後の人生を決定する「教育」と出会う。一つは，黒人学校の教師（オハイオ出身の黒人教師）ウィリアムズ・デーヴィスとの出会いで，彼から教育への情熱と生徒への丁寧な指導を学んだ。今一つは，ラフナー夫人（ヴァモント州出身で教師資格を持つ）との出会いで，ワシントンは読書・計算のほかに，北部人のプロテスタント倫理と生活信条，合理的家庭管理を学んだ。ラフナー家での経験はまた，黒人の味方は白人有産階級・有識者階級である[9]と彼に確信させるに至った（Harlan, 1988：34-43)。

1872年秋，ワシントンはヴァージニア州リッチモンド郊外にある黒人高等教育機関ハンプトン学院（Hampton Normal and Agricultural Institute, 以下「ハンプトン学院」と記載）に入学し，その後3年間農業，教育，聖書，討論などの教育を受けた（Mathews, 1969：45-51)。ハンプトン学院は，彼の人生に最も大きな影響を与えた機関である。ここで彼は，創始者アームストロングの教育方法，すなわち実学優先，厳格な生活規律，軍隊式訓練などのカリキュラムから，出身地の発展に貢献させる進路指導，北部の教会や慈善団体からの寄付の集め方までをつぶさに経験した。やがて彼は，ハンプトン方式を自らの学校，タスキギ学院に引き継ぐことになる。

卒業後，ワシントンは1875年から79年まで故郷カナワヴァレーで学校教師として働き，79年から81年までハンプトン学院教師として教鞭をとったが，81年アラバマ州タスキギに創設されたタスキギ学院の校長となる。タスキギ学院は，職業教育中心の黒人高等教育機関としてめざましい発展を遂げ，彼は全国的知られた有名人として大きな影響力を持つようになった。

ワシントンの評価を決定的にしたのは，1895年の「アトランタ演説」（The Atlanta Address or the Atlanta Compromise）[10]である。以後彼は，南部白人から「自分の居場所を心得ている黒人」として一目置かれるようになった。確かに演説原稿[11]には，黒人は発

表1 南部社会史とワシントン略歴

南部社会史および黒人史		ワシントン略歴	
1861	南北戦争開始。	1856	(4月5日)ヴァジニア州フランクリン郡に奴隷の子として生まれる。
1865	南北戦争終結。奴隷解放(修正13条)。連邦奴隷解放局活動開始。	1865	ウェストヴァジニア州モルデンに家族とともに移住。
1866	南部再建法成立。 黒人が政治・経済に活発に参加。 黒人の農業労働者化が進む。	1865-67	モルデンの岩塩採掘場,炭坑で働く。初めて学校教育を経験。
1865-70	黒人高等教育機関が次々に開設。		
1868	憲法修正14条。	1867-72	ラフナー家のハウスボーイとして働く。
1869	南部全州政府が共和党政権となる。		
1870	南部州の連邦への復帰が完了する。憲法修正15条。	1872-75	ヴァジニア州リッチモンド近郊のハンプトン学院にて実学教育を受ける。
1873	経済恐慌。		
1877	北軍の撤退と共に南部再建の終了。以後,民主党単独統治が進み,差別社会システムが復古。KKKによる黒人への暴力テロが頻発。	1875-78	モルデンで学校教師となる。
		1878-79	ワシントンDCのウェイランド神学校で神学を勉強する。
		1879-81	ハンプトン学院で教鞭をとる。
1870-1900	南部内での黒人移動(東から西)が進行する。	1881	アラバマ州タスキギにタスキギ学院創設。
1883	連邦最高裁が1866年市民権法に違憲判決を下す。	1882	ファニー・スミスと結婚。
		1884	全米教育協会大会で「南部における教育概観」講演。
1889-1918	リンチ殺人最盛期(3211件)		
1890	開拓時代終了宣言。小作農増加。	1885	オリビア・デビッドソンと結婚。
1895	フレデリック・ダグラス死去。	1892	第一回タスキギ黒人会議開催。
1896	連邦最高裁 *Plessy v. Ferguson* 判決。以後「分離すれど平等」原則が確立し,南部の人種差別システムを容認する。	1893	マーガレット・J・モレーと結婚。
		1895	アトランタ演説。
		1896	ハーバード大学卒業式で講演,名誉修士号を贈られる。
1898	ルイジアナ州「祖父条件」を採用。以後南部各州での適用が進む。	1898	ルイジアナ憲法会議にて黒人参政権について演説。
1902	W.トロッター(ボストン)Guardian発行開始,ワシントンへの紙上攻撃を始める。	1899	ヨーロッパ訪問。*The Future of American Negro* 出版。
1903	デュボイスが論文"Of Mr. Booker T. Washington and Others"中でワシントン批判を展開。	1900	全米黒人実業家団体結成。
		1901	*Up From Slavery* 出版。ダートマス大学より名誉博士号を贈られる。ホワイトハウスにてルーズベルト大統領と会食,南部の指導者任命について意見を求められる。タスキギ学院卒業生をトーゴ(西アフリカ)に派遣。
1904	ナイアガラ運動開始。		
1909	NAACP創立。		
1911	全米都市団体結成。	1911	*My Larger Education* 出版。ヨーロッパ訪問。
		1912	*The Man Farthest Down* 出版。
		1915	(11月14日)タスキギにて死去。

(筆者作成)

展途上人で，白人の援助が必要な人種であると描いている。しかしその一方で良識ある白人は黒人を援助する責務と神の裁きに耐えうる司法制度を確立させる義務があるとの主張も見られ，見方によれば，白人に対する道徳的挑戦とも受け取れる。

ここに彼のレトリックの原点が見える。彼は，劣等者（McElroy, 1992：92）や，田舎者（Jones, 1999：38-40）として黒人を表現した上で，キリスト教倫理を媒介にしつつ白人との協力関係を樹立し，白人に黒人の発展を援助させようとした。ワシントンは，差別や不当な取り扱いが制度化され，黒人にとって悪化していく南部の社会状況を的確に認識した上で，あらゆる機会と方法を使って「黒人の生存」と発展の可能性を残そうとしたのではないだろうか。以後の彼の人生がそれを検証する。以下，2ではタスキギでの教育，3では彼のその他の活動を見ていくこととする。

2．ワシントンの漸進的改良策の中心——教育

野心家であったワシントンが，政治ではなく教育を自己実現の方法として選び，活動拠点とするに至ったのは，まさに時代状況を見る現実的な目と，自らの成功への情熱のなせる技であった。職業教育を中心とした徹底的な実学教育を採用すれば，当時の白人層の警戒心を解き，黒人に対して具現的な利益をもたらすと考えた彼の目論見は，実際に大きな成功と名声をもたらした。彼は，政治をめざさなかったからこそ，大きな政治力を行使できたと言える[12]。

(1) 19世紀末の南部黒人教育とワシントンの位置

南部における解放奴隷に対する教育は，南北戦争中に北部の援助によって開始された。最初の学校は，1861年9月ヴァジニア州モンロー砦でアメリカ宣教協会（the American Missionary Association，以下AMA）[13]が派遣した宣教師ルイス・C・ロックウッドによって開始され，昼間クラスを黒人女性教師メアリ・ピークが担当した。翌年3月には，エドワード・L・ピアス将軍の要請で，ニューイングランド解放奴隷援助会（the New England Freedmen's Aid Society，以下NEFAS）[14]から派遣された31名の教師が，ポート・ロイヤル実験校（サウスキャロライナ）を開設した。教育と労働の機会を同時に提供することを特徴としたこの実験校は急速に拡大し，1865年半ばには，サウスキャロライナ沿岸部で合計9000人以上の黒人が在学するに至った（Parmet, 1971：128）。

1865年3月，戦争終結とともに連邦議会は，解放奴隷局[15]を設置し，解放奴隷局は，AMAなどの民間機関との協力により，南部各地に学校建設を進めていった。しかし南北戦争後の余熱がさめるにつれ，解放奴隷局への支持は低下し，1870年夏には解放奴隷局の全ての教育活動は幕を閉じた。5年間で解放奴隷局が教育の機会を提供できたのは，南部学齢期児童の10パーセントであったが，局は3つの功績を残した。一つめは，「黒人学校」の観念を南部中に知らしめたこと，二つめは，黒人教師を養成する師範学校などの高等教育機関を建設した[16]こと，三つめは，全ての児童を対象とした普通教育の理念を，南部全州の憲法に追加させた[17]ことである。

ワシントンがタスキギ学院を始めた時期には，すでに南部黒人をめぐる社会状況や教育環境は悪化しつつあった[18]。例えば，1890年アラバマ州教育委員長ソロモン・パルマーは，予算問題に関連して黒人公教育の縮小を求め[19]，州議会に意見を提出した。1891年2月に法となったHouse Bill 504[20]は，州教育委員長が地域の就学年齢児童数に応じて教育予算

を各地域に分配するものの，地域内での教育予算の分配方法については，その管財人の手で「正当な分配（just and equitable)」[21]を行うことを定めた。これにより，パルマーや民主党の思い通り，教育予算は白人学校に集中的に分配されるようになり，黒人学校は，劣悪な処遇に甘んじなければならなくなった（Anderson, 1990：46-55)。

ワシントンは，このような状況下で，黒人教師の組織化を図るとともに，タスキギ学院存続のため，州白人支配層と良好な関係を築いて黒人公教育の「存続」に努力した（Fairclough, 2000：75)。

(2) ワシントンの活動の中心—タスキギ学院

タスキギとの関係は，1881年5月アラバマ州タスキギからハンプトン学院長アームストロング宛に，新設師範学校校長候補の推挙依頼の書簡[22]が届いたことに始まる。アームストロングは，迷わずワシントンを推薦し，アラバマ側の早々の同意で赴任が決定した（Harlan, 1972：109-116)。

タスキギ学院は，30名の第一期生を迎え，1881年7月4日正式に開校したが，学校施設の物理的問題から，すぐに現在地の元プランテーション[23]に移転した。以後，白人社会からの寄付と生徒自身の労働により学院は発展する。1883年には，早くも生徒数169名，1890年には450名の在学生を数え，黒人実学教育のメッカとして，また南部黒人へのサービス中枢として，モデル教育機関の役割を果たしていく。

(a) 教育理念—ワシントンのめざしたもの

タスキギ学院を支える教育理念は，①肉体労働の尊重，②実学の尊重，③生活指導の尊重，④社会貢献の四つの柱によって成り立っていた。これらは基本的にハンプトンから引き継いだ理念であるが，ワシントンはより厳格に実行しようとした。それはおそらく次の二つの理由による。一つは，教育によって黒人が自己改革と能力開発を実現するためには，奴隷文化と貧困文化を払拭し，その上に勤勉さと清潔さの文化を植え付けることが必至と彼が考えたこと，今一つは，黒人である彼が失敗すれば，白人の多くが望む黒人の劣等性を証明することになる（Denton, 1993：97）ため，タスキギ学院を成功に導くのに必死であったことである。

肉体労働：黒人に労働倫理，汗を流して努力することの大切さを教えた。しかしこれは，南部白人が主張する「黒人が肉体労働に向いている」ことを承認するものでは決してない。彼は，それによって，黒人の主体性が確立し，また白人の信用を得られると考えていた。とりわけ肉体労働の強調が必要であったのは，当時，白人が「黒人は怠け者であるから，白人が常に監視しなければならない」と主張していたからである。ワシントンは，常に言動より実行を重んじ（Washington, 1901：199)，熱心な労働の繰り返しと，失敗しても成功するまで努力すること[24]が，黒人に経済的成功をもたらすと考えていた。

実学の尊重：教育は，実社会で使えなければならないとし，抽象的学習を排除した[25]。日常性と総合性を備えたカリキュラムや体験学習（Washington, 1969：134-139）は，南部黒人教育の基本方式として発達した。

生活指導：白人社会の生活態度や習慣を身につけさせた。当時の黒人家庭では不可能であった「しつけ」は，黒人が市民生活に入るためにどうしても必要であった。ベッドメーキングなどの基本的生活習慣，歯磨きや洗濯などの清潔さ，目的や用途に合わせた身繕いや言動，読書や祈りの習慣などが，寮生活や講習会を通じて黒人社会に紹介された。

社会貢献：黒人社会全体の向上に奉仕することと，黒人のニーズに即応することは，黒

人教育機関の使命であった。彼は学院の卒業生を地域の公教育機関や農場に送り出し，タスキギの実験的事業にも従事させた。さらに社会教育を通じて，黒人の生活改善を行った。

(b) 教育内容—職業教育と成人教育

タスキギ学院のカリキュラムは，「現実の必要」と「理想の実現」をめざして企画された。前者は黒人の現在の必要から始めたもので，教育と労働の一本化，技術と学問の一体化，成人教育や巡回教育などの地域貢献事業として具体化した。後者は「白人と同レベルの市民性の獲得」というゴール達成のために計画されたもので，清教徒の伝統に基づく厳格な生活習慣や道徳の徹底，質素倹約の奨励，自己管理や集団行動の訓練などを行った。

労働と教育の一本化は，実学，特に体験重視のワシントンの教育理念に基づく[26]だけでなく，ゼロからスタートしたタスキギ学院では，学校施設の充実や教育資金確保のための現実的ニードでもあった。本格的工業教育は，レンガ生産に始まり，その後1887年には，家具とマットレス製造，次いで金属加工（鍛冶），馬車製造などが加わる（White, 1991：27)。食料や飼料生産としての農業も当然ながら当初からの基幹科目であった。また作文は農村改良をテーマに，数学は施肥の計算というように，技術と学問は常に一体で教育が行われた。

今日まで続くワシントンの功績は，社会教育のうち成人教育（adult education）と遠隔地教育（extension education）の二つの方式を発展させたことである（Frantz, 1997：90)。タスキギ学院では，すでに1883年秋には夜間部が開講され，職業教育が充実するにしたがって，一般向けの短期コースが開設されていった（Denton, 1993：109)。また，キャンパスの外に古い農家などを買い取って改造し，「生活モデルハウス」として展示するとともに，その施設を利用して子供から大人までを対象に，生活に密着した教育を行った（Washington, 1969：145-151)。いわゆる農村セツルメントハウスとも考えられる，この暁星 Rising Star と呼ばれる社会教育施設は，タスキギ学院の主要事業として，南部の各地に作られていった。次いで，農家の窮乏の実態を知るワシントンは，1892年２月「第一回黒人会議」を開催し，黒人農家にその生活向上のために何が自分たちでできるか話し合わせた（Jones, 1975：253-255, Denton, 1993：109-110)。この黒人会議は毎年拡大し，農家の情報交換やタスキギ教員による農業技術や生活改善の指導の機会として発展した[27]。タスキギ黒人会議の方式は，南部各地に広がり，黒人の自意識と能力を高めるのに役立った。

会議の成功により，農家生活改善に意欲を燃やしたワシントンは，タスキギ学院を農業教育の中心機関とすることとした。彼はまず，農業指導の専門家ジョージ・W・カーヴァーを1896年学院の専任教員として迎え，翌1897年には，タスキギ学院を州事業「黒人農家のための農業実践教育」支部とすることに成功し，事業予算の基盤を確保した。これにより，タスキギ学院では学院の施設を使い，1897年11月から月１回の無料農家講習会を行った。内容は，鶏の世話の仕方，畑の耕し方，農業経営の初歩など，どれも身近な内容で，日常生活にすぐに応用できるものであった。この講習会の成果は，1898年以後「農家講習会祭」として披露され，その効果が明らかになった。農家講習会祭には，白人農家も参加するようになり，黒人農家の展示する作物の著しい改善は，白人に対して黒人の自助努力の成果を証明する最も良い事例となった。1900年以後，無料農家講習会方式は，南部の各農業大学でも実施され，同時に農家講習会祭も各地で開催されるようになった。

これらの事業を実施するうち，僻地農家に対する生活改善事業の必要性を痛感したワシントンは，巡回指導を思いつき，カーヴァーを中心に巡回指導の具体案が企画され，生産増進に必要な農具と資料を馬車に積んで農家を訪問指導する方式ができあがった。1906年

5月「ジェソップ農業馬車」は，最初の巡回指導者ジョージ・ブリッジフォースを乗せて，農家を回り始め，同年夏だけでも，2000人以上が巡回指導を受けた。1906年11月からは，連邦農業局からの申し出により同局黒人成人教育事業との相互協力関係ができたため，巡回農業指導は両者の予算をあわせて実施されることとなり，指導者は連邦農業局指導官の地位を与えられた。巡回指導は，第二次世界大戦まで継続され，農業だけでなく，家政や保健の指導も併せて実施された（Jones, 1975：262-264）。

(c) 学校運営―白人上流階級からの寄付

当時の南部黒人高等教育機関，とくに農業・工業専門学校は，第2モリル法により設立された公立学校が多かったため，経営の実権は白人に握られていた。たとえ黒人が校長であったとしても，白人が圧倒的多数である理事会から教師の任命から教育内容まで干渉を受けることが多かった。しかし，タスキギ学院は民間の寄付に頼る部分が大きかったために，ワシントンは比較的自分の意志で運営を行うことができた（Fairclough, 2000：75）。

寄付の実態をみると，まず学院の設立当初のハンプトン学院からの有形・無形の援助がある。アームストロング学院長はワシントンのアドバイザーであるとともに，彼を北部の慈善家に紹介し，寄付者を拡大するために重要な役割を果たした。さらに，初期からの寄付者として挙げられるのは，黒人への職業教育の普及に熱意を持っていたピーボディ財団とスレーター財団の二つがある。前者は毎年500ドルをいくつかの公立学校に寄付してきたが，1883年州教育委員長ヘンリー・クレイ・アームストロングのすすめにより，そのうちの一つをタスキギ学院に変更した。翌1884年には，スレーター財団が財団初の黒人学校への寄付をタスキギ学院に贈ることを決め，1000ドルを寄贈した。これはその後毎年継続されることになる。これらの初期の寄付を確実にしたのは，ワシントンの交渉努力だけではなく，副校長のオリビア・デーヴィドソン[28]の働きが大きかった。

タスキギ学院は，ワシントンの指導のもとでこれらの寄付を有効に活用し，タスキギ方式実学教育への信用をもとに寄付をさらに拡大していった。具体的には，アンドリュー・カーネギー，ジョン・D・ロックフェラー，コリス・P・ハンチントン，ジェイコプ・ヘンリー・シフ，ジュリアス・ローゼンワルトなどの北部や南部の慈善家たちの名前が挙がる（Harlan, 1988：111）。とくにカーネギーは，学院の最大の寄付者であるだけでなく，タスキギ方式の良き理解者・ワシントンのアドバイザーとなり，学院を支えた（Spencer, 1955：185）。

これらの慈善家との交際は，ワシントンに経済的安定を与えただけでなく，黒人の中で政治的優位を与えることとなった。彼は，他の黒人教育機関への寄付や人事について相談を受けることが度々あり，その権力を大いに活用して，黒人教育関係者から恐れられた。その一方で彼は，黒人農家，小商店，労働者などの地域の黒人老若男女からくる少額の寄付や労働奉仕を，どれも無駄にすることなく，黒人の「自助努力」として喜んで受け取った。タスキギ学院は，次第に南部黒人の誇りと希望として成長し，ワシントンは南部黒人の「父親」的存在ともなった。

(3) 純粋学問の否定―ワシントン＝デュボイス論争

ワシントンは，その生涯を通して，北部の大学卒業者との距離を置き，彼らの主張する抽象的で一般的な学問を認めなかった。その理由は，彼らが使用する学術用語をワシントンが必ずしも理解できなかったことにもよるが，より基本的には，純粋な学問は黒人の生活の役に立たず，無意味であると考えたからであった（Harlan, 1983：151）。

ワシントンの考えによれば，北部の「インテリたち」は北部留まるべきで，南部に口出しすべきでないとも言い切る。なぜならば彼らは，書籍から学んだ原則論を振りかざすだけであって，南部を全く理解していないからである。南部で生活し，南部を知り尽くしているワシントンから見れば，北部のインテリたちは，南部の厳しい現実のなかで，ようやく見つけたわずかばかりの「妥協」の余地である，現実的，具体的解決策を簡単に批判する世間知らずと映るのであった（Washington, 1969：112-113）。

北部インテリの代表者としてワシントンと真っ向から対立したのが，W.E.B. デュボイスであった。デュボイスは，1868年マサチューセッツ州に生まれ，フィスク大学（テネシー州）を終えたのち，ハーバード大学，ヨーロッパで学んだ。また彼は，1897年から1910年までアトランタ大学で社会学と歴史学を教えた。従って彼は，そのキャリアから見れば南部の経験もあり，南部の人種差別を十分に理解していたのであって，ワシントンが非難するような「南部の経験がない北部黒人」ではなかった。彼は，当初ワシントンの実学教育について肯定的であったが，1903年にそれと訣別し，黒人の地位向上のための教育に関して全く異なる考えを主張するようになった（Miller, 1994：256）。

デュボイスの教育論の中心は，エリートによる社会改革優先の思想であり，「十賢人（Talented Tenth, 1903）」説を唱えた。すなわち，黒人の指導者は，白人と全く同等の知的能力を備えた者であるべきで，これらの賢人は黒人を指導しつつ，白人に黒人の能力を認めさせ，白人から援助を引き出す役割を果たすというものであった（Miller, 1994：256）。彼の考えを進めると，学力のあるものや経済力のあるものが先に教育の恩恵に預かり，一般黒人はその人生を賢人に依存すればよいことになる。

おそらく，ワシントンがいう「非現実的」という点は，黒人一般民衆の発達が後回しにされる点であろう。彼は，一人一人の理解や判断に基づかない黒人社会の改善はあり得ないと考えたのであった。ワシントンが行った教育は，デュボイスとは逆に，平易で日常的な教育を優先し，社会の底辺層である黒人一人一人の生活を漸次改善していくという，気の遠くなるような試みであった。

3．漸進的黒人地位改善案の全貌

図1にみるように，ワシントンは黒人の地位向上と生活改善を3つの段階で考えていた。第一段階は，奴隷制の時代で，黒人が人間以下に取り扱われた時代である。ワシントンの時代は第二段階であり，制度的には奴隷から解放されたものの，南部の現実は極めて第一段階に近い状態であった。それを第三段階，すなわち黒人問題の最終的解決段階までもっていくために，彼は「黒人の自助努力」と「白人の援助」で，「黒人が市民となれる能力」を身につけることを説いた。

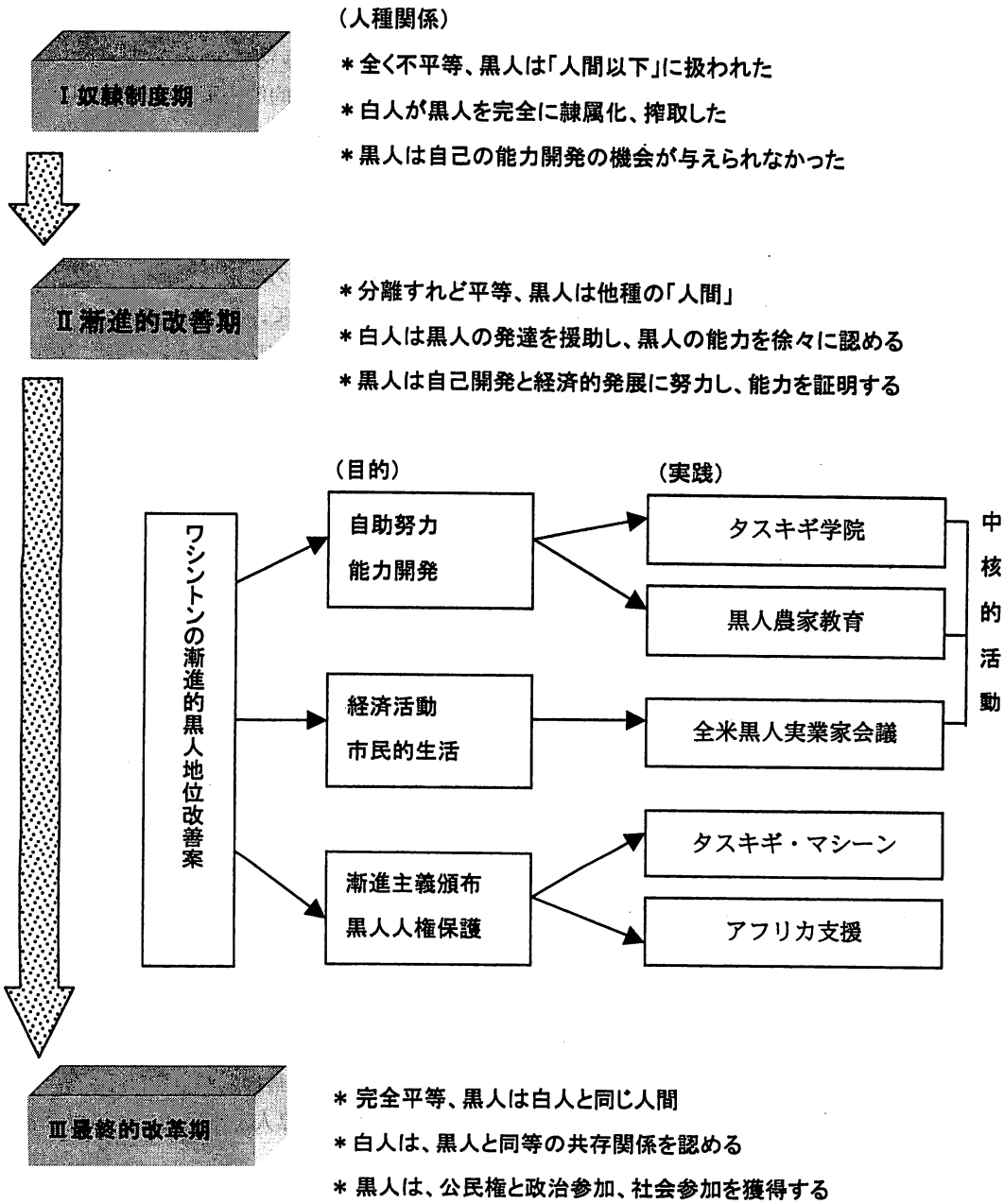
この第二段階を具体化するためにワシントンがとった方法が，タスキギでの教育，黒人農家教育，黒人実業家の育成を組み合わせた実践的活動を中核としつつ，政治的活動と途上国（アフリカ諸国）援助によって彼の理念を宣伝し，かつそれを他者の攻撃から防衛するという方法であった。

(1) 教育以外の各活動の内容

(a) 黒人農家教育

ワシントンにとって，「黒人の発達」が農家によって証明されることが最も重要であった。

図1　黒人社会の発展についてのワシントンの概念図



（筆者作成）

なぜならば，当時の黒人のほとんどが農業従事者であり（Ferguson, 1998：42），その生活改善こそが，黒人にとって差し迫った必要で，かつ白人に「黒人の発達の可能性」を理解させる事例として有効だったからである。

黒人農家の「発達」とは，彼の定義によれば，無知と野蛮な生活をする子供のような状態から，科学的農法と市民的マナーを身につけた大人の状態になることであった。これを

達成するためには，黒人農家を自己改良に目覚めさせ，自らが進んで新しい技術や生活様式を学び取るようにさせる必要があった。そのため彼は，黒人農家の自助努力を刺激する役割として，農家講習会や巡回指導を行った。

タスキギ学院の農家教育の始まりは，本稿の2ですでに触れたが，その後，半世紀にわたり巡回指導を発展させたのは，タスキギ学院出身の連邦農業局指導官トーマス・M・キャンベルであった。彼は，自らの仕事を南部農業の平和的発展に寄与するものと考え，ワシントンの精神である「黒人の自助努力」と「白人との協調」を忠実に実行した（Ferguson, 1998：43)。当初のキャンベルの指導は，具体的には，農具，種苗，肥料，良種の家畜，その他の道具を積んで黒人農家を訪問し，自ら見本を見せながら，科学的農法とその効果を説明した上で，政府から与えられた最良の種と肥料と初歩テキストを農家に配布することであった（Jones, 1979：44)。

しかしこの黒人指導官による巡回指導は，当初，白人の農場主からは敵意と冷ややかな目に迎えられ，黒人の農家からは全く信用されないという試練に遭遇した。白人農場主から見れば，黒人指導官が直接黒人に農業を教えるのは，自らの権威への挑戦と感じられた。彼らは，黒人たちが白人の監視下でも機会を見つけて怠けようとするのに，自ら学ぶ努力をすることなどあり得ないと主張した。さらに白人農場主は，自分の農場の黒人が「よそ者の黒人」にそそのかされて反抗したり，逃げ出したりするのではないかと恐れてもいた(Ferguson, 1998：37)。それに対してキャンベルは，「現状の人種関係」に手をつけないと保障した上で，黒人農家の生産力が増せば，白人農場の収入が増加すると説明し，白人の理解を得るよう努めた。また，黒人農家に対しては，まず彼らと個人的に親しくなるよう努力し，打ち解けてから，世間話や悩みを話す機会をとらえてアドバイスを行うことにした。このような段階を経て，巡回指導は少しずつ軌道に乗っていった。

キャンベルと彼の部下の巡回指導は，「農作物の種類を増やすこと，輪作をすることと，家族のための食料や家畜飼料の生産を増やすことが黒人農家の自給自足率を高め，その結果，借金返済が早まる」ことを教えた。彼らは，黒人農家に倹約と勤勉が備われば，彼らが土地購入資金を貯めることができ，自作農になれると本気で信じており，黒人農家に対してその教育を熱心に行った（Ferguson, 1998：46-48)。これは，黒人農家発展についてのワシントンの仮説，すなわち自作農化を第一にすること，に基づくものであった。ワシントンは，「白人に差別されても白人に依存せざるを得ない」現状から黒人が解放されるには，黒人が自助努力により自作農になることだと考えていた。また彼は，土地を取得しなければ，黒人農家が農業で成功するチャンスがほとんどないとも考えていた。

なお，巡回教育の成果かどうかは別にして，南部の一部では，この期間に実際に黒人自作農がある程度増加した。この内訳を見ると，南部の綿花地帯では，白人による搾取のシステムが強力であったため，黒人の自作農化は成功しなかったが，他の地域では，黒人自作農の増加が見られた。1890年から1915年の期間は，一般的に最も人種差別システムが厳しくなった時期と言われているが，黒人農家にとっては，それにもかかわらず南部再建期以来の景気の良い時期でもあった。この時期，黒人自作農は増え続け，ピークに達した1910年には，南部の自作農の16.5パーセントを占めるまでになった。この付随効果として黒人経営の金融機関や商店も増えたが，1914年の綿花価格暴落によりその繁栄も幕を閉じた(Ferguson, 1998：48)。

巡回指導の評価は，好評・不評の双方がある。タスキギ学院側の記録では，巡回指導は数々の成功を修めた（Jones, 1979）ことになっているが，実は巡回指導が黒人農家に不評

であったとする意見もある。例えば，黒人小作農は，「(白人農場主などから) 強制されなければ巡回指導には参加しなかった」，「土曜日の指導にはほとんど人が集まらなかった」，「農作物の展示品の出品を拒否した」，などの例が挙がっている (Ferguson, 1998：44)。彼らが反発したのは，巡回指導が，白人による差別と搾取をそのままにして黒人にのみ改善を求めたからであった。とくに「タスキギから来た」指導員がもたらす生活改善指導は，黒人の根本的貧困原因に手をつけず，これまで黒人が家庭や教会を通じて形作ってきた地域文化の否定にのみ熱心だと受け取られた (Ferguson, 1998：43)。

結局，タスキギ方式の農家指導は，農業生産を向上させることには成功したが，農家の生活を向上させることに成功したとは言えない。すなわち「土地を持つことのできた少数の黒人には，大きな成果をもたらしたが，黒人農家の90パーセントを占める小作人や農業労働者には何の利益もなかった。」(Ferguson, 1998：53)。なぜなら，小作人や農業労働者の生産力向上は，白人農場主の巧みな搾取によって，白人に吸い上げられてしまったからである。ワシントンの意図した貧農の生活向上は，南部の社会構造のなかでは実質的効果として現れなかった。

(b) 黒人実業家団体

黒人実業家の組織化は，実のところワシントンの政敵デュボイスが先に提案したものであった[29]という説 (Harlan, 1988：98) と，ボストンの黒人実業家 J.H. ルイスの意見を聴いてワシントンが始めたものである[30]とする説 (Denton, 1993：119) がある。ともあれワシントンは，デュボイスに先駆けて1900年夏，ボストンにおいて，第一回全米黒人実業家団体 (the National Negro Business League，以下 NNBL) 大会を開催した。呼びかけに応じて集まった黒人実業家300人は，席上，人種関係の危機[31]などを話し合った(Harlan, 1988：98-100)。但しワシントンは，NNBL 組織化の目的については非常に神経質になっており，記者会見で「政治とは無関係で，経済のみの集まり」であると定義することを忘れなかった (Harlan, 1983：268)。経済を政治的にニュートラルな状態に置くことは，彼の活動全体を保持するために絶対必要だったからである。

NNBL は，その後ワシントンの後ろ盾を受けて急速に成長し，1915年の大会には，3000人を超える代表者がボストンに集まった。そのころには，600の地区団体 (うち300は全国団体に加盟)，加盟者合計にすれば合衆国内36州と西アフリカを合わせて，5千人から4万人のメンバーがいたと言われる。ワシントンは，設立以来亡くなるまで NNBL 会長をつとめ，タスキギ学院からの資金援助や，民間篤志家や共和党政治家と黒人実業家との交流促進に貢献した。また自らの秘書を主要メンバーが居住する北部に頻繁に派遣するなど，NNBL の組織拡大と運営安定化に配慮を続けた。

おそらく革新的なデュボイスでなく，保守的なワシントンが会長を努めたことは，NNBL のメンバーにとって幸いであった。その理由の第一は，彼がタスキギ学院や知己を通じて，NNBL に資金や情報を提供することができる立場にあったこと，第二は彼が実業家の仕事を自分の経験，すなわちタスキギ学院の経営を通じて理解していたこと[32]，第三は，彼の徹底した実利主義や白人との協調路線は，この時期の黒人実業家が事業を展開する上で必須条件であったからである。

ワシントンが，このように NNBL に熱心であったのは，それが彼の思想「黒人の自立」を実現するのに最も有効だと思われたからである。彼は，黒人実業家の成長が，黒人社会全体の経済的自立を高めると考えていた。すなわち，黒人商人の数と種類が増えれば，黒人が合法的に白人から金を取ることができる機会が増える。さらに黒人が白人商人から購

入する機会が減れば，黒人の財産を黒人社会に留めておけると彼は考えた。

しかしまた彼には，このような原則的思慮だけでなく，自らの政治的指導力擁護のために，NNBLを支援した面もあった。NNBLは，彼の漸進主義を進めることに役立ち，黒人過激派の牽制に役立った。彼は，NNBLが経済界で黒人が成功することの鍵を握っており，それが成功すれば，自らの進化論的アプローチを革新主義者の攻勢から守れると考えていた。また白人に能力が認められれば，公民権や人種平等政策を主張できる(Harlan, 1988：105)最終段階に入れるとも考えていた。そこで彼は，NNBLの強力な組織力と経済力を，いわゆるタスキギ・マシーンの一部として利用したのである。具体的には，黒人過激派の動きに関する情報収集や妨害工作に利用し，公民権の即時獲得をめざすナイアガラ運動やNAACPの他の活動を各地で牽制しようと試みた。

ワシントンの存命中，NNBLが成功した理由は，まず黒人実業家の活動が北部中心であったという地理的条件と，NNBLをウィラードやミルホーランドなどの白人指導者が支持していたという政治的条件のために，南部白人の攻撃に晒されなかったことがある。また，ジョン・ウォナメーカー，アンドリュー・カーネギー，セオドール・ルーズベルトなど，当時の合衆国の政治・経済をリードする人々がワシントンを支持していたために(Harlan, 1988：105-106)，間接的にNNBLを支えることになった。さらに，NNBLのメンバーは，黒人の中で高等教育を受けた者や中産階級出身者が多く，実業界で成功する能力を持っていたという，組織メンバーの質の良さも大きな理由である。

但し以上のような成功理由は，同時にワシントンの意図の一部，「北部の黒人実業家に南部の黒人市場を提供し，黒人社会の経済的自己完結化を図る」ことを，実現に至らせなかった。南部黒人は，南部の差別構造の中で，自らが消費できる財を蓄えることがなかったからである。

(c) 政治活動

政治家ではないと自己規定をしながら，ワシントンの動きは，非常に政治家的であった。彼の政治活動の動機は，黒人社会全体の生存，タスキギ学院とその教育方式の継続発展，自らの人望や名誉に対しての欲望の三つであった。実際，「差別社会に生きる黒人にとっては，政治は日常生活を維持するために不可欠のもの」(Harlan, 1972：255) であり，ワシントンもそれを逃れられない運命にあったが，彼のそれは複雑で屈折したものであり，誤解を受けたところも多い。

ワシントンは，人種隔離制度を容認したため，公民権獲得を優先する黒人過激派との政治的確執が続いた。この確執は，黒人社会のなかでの指導権争いとも見えるが，当初は1895年以来白人との協調路線を明確にしてきたワシントンが，南部の黒人層を手中に治め，北部のパトロンの支持を背景にして，絶対的に優位であった。ワシントンの黒人社会での地位は，1901年のルーズベルト大統領との晩餐会に頂点を迎える。しかし南部の社会状況悪化と，中央の政権交代，黒人過激派の成長，特に彼の晩年NAACPの創立によって，過激派の勢力が増したため，彼の政治力は急速に減退する。ワシントンは，タスキギ・マシーンや秘密の政治活動を行って地位保全を図ったが，1913年以後はほとんど政治的影響力を喪失した (Meier, 1963：115)。

ただし，ワシントンには一般的に知られているような妥協主義者とは別の面も見られる。彼は，表面的には白人に媚びるとも見える態度をとりながら，その実，白人支配体制の切り崩しに通じるような活動を裏で支援したり (Harlan, 1988：110-113, Bruce, 1995：241)，リンチ殺人や黒人の投票権剥奪を試みる州法設定に対しては，強固な反対活動を行

い，ロビー活動，買収，恐喝，スパイ活動などさまざまな企画を秘密裏に実行に移していた（Meier, 1963：110-111）。

彼のこの秘密政治活動は，それを知る者に矛盾する人物像を与えもするが，漸進主義の最終目的地が白人との対等な関係であるとすれば，それを逆行させる動きに，あらゆる手段を使って抵抗しようとする点で，漸進主義との一貫性を見ることもできる。ただし，表だった政治活動ではなかったのは，一重にワシントンが現実主義者であったからである。白人との直接対決は，南部の厳しい社会状況を身にしみてわかっている彼にとってみれば，黒人に何の利益ももたらさないどころか，自殺行為ですらあった。それは，苦労して築いた「対話の可能な土壌」を失うことであり，南部黒人が「現実に必要としている」資金源，すなわち南部上流階級や北部慈善家の支援を失うこと，すなわち漸進主義の破滅であった。なおワシントンは，ハンプトンの学生であった時期には，一時政治家か弁護士になろうとも考えていたから，政治に興味がなかったはずはないが，タスキギに赴任したころには，すでに南部は黒人にとっての暗黒時代になりつつあった。彼が政治の夢を描いた再建期とは，あまりにも違う厳しい状況であった。

(d) アフリカ諸国との関係

ワシントンとアフリカとの関係は，決してワシントンの側から始まったものではない。現実主義者のワシントンにとっては，合衆国南部より未発達のアフリカ[33]が，南部黒人の発達に寄与するとは考えられなかったし，また貪欲な欧州が植民地を手放すとも考えられなかったから，ユートピア建設をアフリカに期待することもなかった。彼は，「黒人のアフリカ帰還」論[34]には終始反対であり（Erhagbe, 1996：62），黒人の世界連帯を主張する人々とも常に一線を画していた。

1900年以前には，アフリカ支援に全く興味を示さなかった[35]ワシントンが，アフリカに関わり始めたのは，彼に意見や指導，援助を求める動きが，アフリカ側から発せられたからである。タスキギ方式は，アフリカの白人，黒人双方から注目されていた。アフリカの支配者である白人は，人種問題に手をつけず，黒人社会の農業や工業の技術的発展を指向したところを注目し，植民地に大農場を建設して，現地の黒人を労働力としながら商品作物生産を行う方法，とりわけ綿花栽培の方法をタスキギから移転することを考えた。一方黒人は，タスキギの職業教育とワシントンの提唱する自助努力の精神が，植民地政策に抵抗する基礎になると考えていた[36]（Harlan, 1988：266）。

それらに促されて，ワシントンは，技術指導や教育方法へのアドバイスを与えたり，米国内での宣伝活動や政治的圧力行動を開始した。なお前者の対象は，トーゴ，スーダン，南アフリカで，タスキギから技術と共に自助努力精神と漸進的改善方式をアフリカに移植する試みが行われた。後者の対象は，ベルギー領コンゴ，リベリアで，ワシントンは，黒人に対する暴力的，非人道的，脅迫的行為の禁止・排除を世界（実は南部白人）に訴えようとした。

トーゴには，1901年1月，綿花栽培指導のため，タスキギ学院の教員と卒業生あわせて9名が渡った。1903年以後は，このうちジョン・W・ロビンソンのみが残ったが，1909年ロビンソンが川で溺死したため，トーゴとタスキギの関係は終了した。このほか，ワシントンは，スーダンにも綿花栽培指導を，南アフリカ植民政府には職業教育と黒人教育のあり方についての助言を行った（Harlan, 1988：270）。なお，タスキギ学院は，黒人の教育と生活のモデルとして，アフリカ諸国にとって具体的目標を提供した（West, 1992：376）と言えるが，タスキギ教育の実際的転移は，アフリカ人宣教師などによるアフリカ側の自

主努力で実施された。

アフリカ問題に対しての政治活動には，ワシントンは公然と自分の影響力を行使した。彼が一番熱心に係わったのはコンゴで，黒人への強制労働と警察による暴力行為をやめさせるため，コンゴ改革協会の副会長として熱心な広報活動を行った。またリベリアについては，1910年リベリアの領土保護のための戦艦派遣を合衆国政府にすすめ，1912年には同国の国際借款の肩代わりをアメリカにさせたりした（West, 1992：375)。彼とアフリカとの関係は，1912年「黒人国際会議」をタスキギで開催したときに頂点を迎える。黒人，白人双方の人種問題専門家120名を，植民地を含む21か国から招き，3日間にわたり黒人問題についての議論を行った。

(2) 漸進的生活改善案は成功したか？

人種差別の体制を直接攻撃せずに，黒人の自助努力を中心に改善をはかるというワシントンの計画であったが，彼が期待したほど，それは黒人の生活向上をもたらさなかった。なぜなら，南部の差別と搾取の社会システムの中では，漸進的改善の可能性さえもなかったからである。小作や農業労働者にとっては，努力の成果は，さまざまなトリックにより全て白人に搾取されるのが常であった。さらに，白人貧農も多かった当時の南部では，黒人の経済的地位が実際に向上すれば，KKKなどの攻撃対象となり，即座に生命の危険が伴った。ワシントンの計画は，底辺層の黒人にとっては，最初から非現実的なものであったとも言える（Fairclough, 2000：73)。

最終的に「南部黒人」の問題は，黒人の脱出（Black Exodus）により一応の解決を見る。それは，南部に被差別対象が「いなくなった」からである。黒人の南部から北部への大量移住は，北部が大量の非熟練労働者を必要としたことから始まった。20世紀に入ってから，北部工業は，大企業の発達とテーラー方式などの科学的経営により，大量の非熟練労働者を必要とするようになった。それに第一次および第二次大戦の戦時需要が加わる。これに応えて，南部黒人は，将来の希望がない南部を捨て，次々と北部に向かった。黒人の住む場所も従事する産業も一気に変わり，ワシントンが生活改善の対象と考えた南部の黒人農民は，もはや黒人問題の主流ではなくなっていった。

ワシントンの事業は，むしろ彼の意図した経済生活の向上以外のところに，真の存在価値が見いだされる。その一つは，白人の暴力を緩和し，黒人社会を保護する働きをしたことである。例えば，アラバマ州メコン郡は，南部の奥（Deep South）にあったにも係わらず，タスキギ学院設立後は，一度もリンチ殺人が起こらなかった（Ferguson, 1998：49）ことに端的に現れている。また巡回教育指導員が「タスキギ学院から来た」と言った途端に，白人農場主の態度が急に変わり，協力が得られたという事例もある（Jones, 1979：45)。ワシントンの協調主義，すなわち「現状維持」を望む白人の支配を脅かさないという姿勢は，南部白人に一定の安心を与え，その結果，当時の南部では日常的であった「白人からの暴力」の件数や程度を減らし，南部黒人社会が破壊されることを防いだと言える。

二つめは，タスキギ学院が，黒人のショーケースとして，大きな宣伝効果を発揮したことである。「白人の理解と協力」が黒人の発展に欠かせないという彼の考えは，タスキギ学院という目に見える見本を提示することにより可能になった。おそらく，タスキギ学院に寄せられた慈善家や協力者の多額の寄付は，実際の使用価値も大きかったが，それよりも白人上流階級と指導者層に黒人が信用を受けることのほうが，長期的に見れば大きな効果があった。また，タスキギ学院の成功があったからこそ，連邦政府との協力方式や，黒人

が連邦政府の職員として採用されるなどの発展も可能となった。

三つめは，黒人の公教育を継続させたことである。たしかに人種隔離政策により，南部の黒人教育は劣悪な環境で行われた。しかしそれは，教育の機会が全くないことよりは，ましな状態であった。ワシントンの教育界での影響力，白人指導者層や政治家との良好な関係は，黒人公教育の存在そのものを守ったと言える。差別社会にあっても底辺層に教育の機会を提供し続け，黒人の能力向上に努めたことが，20世紀後半の黒人社会の発展に大きな貢献をしたことは疑いようがない。

むすびにかえて——ワシントンの黒人社会への遺産

ワシントンの時代から一世紀が経過した。彼の発想や活動は，その後の黒人社会において次のような発展を見た。

①准政治活動（quasi politics）としての教育：もともと教育と政治の結びつきは，黒人史の特徴であるが，20世紀前半により悪化した人種隔離政策下で，南部の黒人教師たちは，単に教室で教育を行うだけでなく，黒人社会の代弁者として辛抱強く活動を続けた。そしてついに1954年，*Brown v. Board of Education* 判決が下った。同判決は，1896年 *Plessy v. Ferguson* 判決以来の「分離すれど平等」原則を覆し，「分離自体が不平等を生み出す」として教育の場での人種分離を禁じた。以来，連邦政府の介入により，南部の差別システムは崩壊していった。

②白人との協調：ワシントンの平和的協調路線は，公民権運動活動家キング牧師に引き継がれた。キングの要求は，あくまでもワシントンが棚上げしていた黒人公民権の獲得であり，白人との完全融合を求めるものであったが，非暴力の手法，黒人と白人の共存，漸進的解決などの思想は，ワシントンの流れを汲むと言ってもよいだろう。

③黒人保守主義：ワシントンは，生前から公民権運動以前まで，アメリカ社会で偉人と考えられたが，60年代以後，彼が黒人にとっての根本的問題の解決，すなわち社会構造変革に手をつけなかったことに対して厳しく批判されてきた。しかし現在では，affirmative action の恩恵を受けた世代によって，黒人中流階級が定着し，黒人の保守化傾向が見られるようになった。彼らは，社会変革より自助努力を主張し，黒人貧困層に対しても手厳しい。また80年代から徐々に増加していた黒人の共和党支持者がますます増え，最高裁判事のクレアランス・トーマスなどは，白人以上に保守的判決を出しつづけている。ワシントンの自助努力優先の思想は，現代の黒人社会に復活していると言えるだろう。

④自助努力（self-help）：黒人は，実際的必要に迫られて，キリスト教会を中心とした，地域社会単位のさまざまな相互扶助組織をその後も発達させてきた。また The United Negro College Fund のような全国組織も数多くあり，黒人社会は，その自助努力により大きく発展してきたといえる。この自助努力は，人種分離主義を掲げる，黒人イスラム教グループ「イスラムの国（The Nations of Islam）」にも引き継がれ，その理論的指導者であったマルコムXは，白人からの援助を否定し，黒人の自主独立を自助によって体現することを求めた。これは，同グループの最近の指導者ルイス・ファルコンにも受け継がれている。

⑤貧困文化・マイノリティ文化の払拭：「適応」理論，それに続く「るつぼ」理論のもとで，マイノリティはメインストリーム文化を身につけることを強制されてきた。ワシントン以来，多くの黒人教育者も貧困文化の払拭をめざして教育を行ってきた。しかしこの

ことは，マイノリティ文化を従属的，劣等的なものとして子供に意識付け，マイノリティの家族内での葛藤や，不安定な自己確立，将来への希望の喪失など，逆にマイノリティを貧困状態に閉じこめる役割も果たした面もあった。そのため多文化教育が主張されるようになり，「文化の優劣をつけない」「歴史記述を様々な人種や民族の貢献を評価するものに変える」などの努力が行われてきた。

ところが，最近ではまたスペイン語での学校教育批判に端を発し，英語優先，メインストリーム文化優先の教育が叫ばれるようになった。ワシントンが考えたように，実際問題として英語を正しく使え，アングロサクソン中心の文化と歴史についての教養がなければ，アメリカ社会での成功のチャンスはない。この現実とマイノリティの自己確立，人種や民族の文化の保持がどう折り合えるのかが，今後の大きな課題となっている。

注

1 ニューディール期初頭，ルーズベルト大統領が用いた表現，Forgotten Man.

2 Rudwick, Elliot. "The Overture to Protest: Beginnings of the Du Bois-Washington Controversy." In David Reimers. *The Black Man in America since Reconstruction.* 1970. The article was originally published in *W. E. B. Du Bois: A Study in Minority Group Leadership* (Philadelphia: University of Pennsylvania Press, 1960)

3 詳細は，本論2(3)参照。

4 当時のジョンソン大統領は，自らの人種差別意識を基礎として，南部白人に寛大な再建策をとり続けてきたが，北部の一般市民の増大する不満を受けて連邦議会は，解放奴隷局法，市民権法，南部再建法など一連の南部改革法を可決した。

5 サウスキャロライナ知事をはじめとして，南部各地で，副知事，教育委員長などの州首脳部，またミシシッピ州からは有名なハイラム・レヴェルズ，ブランシェ・ブルースの2人の上院議員を輩出した。

6 いわゆるCarpetbaggerといわれる人々。

7 1861年のボローグズ家資産記録によれば，ムンロー＄600，ソフィア＄250，ジェーン(母)＄250，リー＄1000，グリーン＄800，メリージェーン＄800，サリー＄700，ジョン(兄)＄550，ブッカー（ワシントン）＄400，アマンダ（妹）＄200が登録されている。(Harlan, 1972)

8 Thornbroughによれば，ワシントンがラフナー家に奉公に出たのは，1871年となっている（Thornbrough, 1969：27）が，より詳細な調査をもとにワシントン伝を書いたHarlanの記述にしたがった。おそらくThornbroughは，1870年の国勢調査においてワシントンがファーガソン家の家族として記載されていることをもとに1871年としたと思われる。一方Harlanは，ラフナー夫人の手紙（Viola Ruffner to Gilson Willetts, May 29, 1899, in Willetts, "Slave Boy and Leader of His Race," *New Voice,* XVI, June24, 1899）に初めてワシントンがラフナー家に召使いとして行ったのを1865年と記載していることを根拠に，かなり早い時期からラフナー家に通っていたことを指摘し，住み込みに近い状態になったのを1867年としている（Harlan, 1972：39)。ワシントンとラフナー家との関わりを考えると，ハンプトンに入学する一年前にラフナー家に行ったことになるThornbroughの記述は，不適当であると思われる。

9 例えばマジソンにおける講演での表現。「Any movement for the elevation of the Southern Negro, in order to be successful, must have to a certain extent the cooperation of the Southern whites. They control government and own the property....」"The Educational Outlook in the South." *Journal of the Proceedings and Addresses of the National Education Association, Session of Year, 1884, at Madison Wisconsin* (Boston, 1885), pp.126-28.

10 演説の内容 (Thornbrough, 1969：33-36)

11 *The Negro and Atlanta Exposition. Baltimore: Trustees of the John F. Slater Fund, Occasional Papers, No.7,* 1896. pp.12-15. (Thornbrough, 1969：33-36)

12 例えば，ルイジアナ憲法会議における演説初頭で，「I am no politician; on the other hand, I have always advised my race to give attention to acquiring property, intelligence and character as the necessary bases of good citizenship, rather than to mere political agitation.」と述べ，自分が政治家ではないとことわっている。

13 1849年創立。反奴隷制度運動を中心に活動を展開したが，1861年以後は，活動の中心を教育活動に変更。1865年アラバマ州モービルを皮切りに，連邦解放奴隷局との協力方式で，南部に次々と学校を建設した。1870年には，AMA が南部の学校に送り込んだ教師と宣教師の数は，3161人に達した。また1866年からは，連邦解放奴隷局からの助成金を受け，南部各地に中等および高等教育機関を建設した。

14 1862年２月，ボストン教育協会によって創立。非宗教団体として解放奴隷援助を手がけた最初の団体。活動目的は，「北軍の奮闘の結果，奴隷制度から解放された人に対して，産業，社会，知識，道徳，宗教の各方面に関しての向上を図る」ことであった。ポート・ロイヤル実験校から約20年間 NEFAS は活発に活動を展開し，最終的には，現金40万ドル，援助物資15万ドルを解放奴隷に提供した。

15 この機関は当初，解放奴隷の一般福祉に資することを目的とし，教育に関しては，直接学校を建設することは認められず，民間によって設立された学校を支援することとされていた。しかし1866年の改正法以来，むしろ活動は教育分野を中心とするようになった。

16 南北戦争以前，黒人高等教育機関は，ウィルバーフォース(オハイオ)，リンカーン(ペンシルヴァニア) の２つしかなかったが，1865年から1970年の５年間に約30校が創設された。その中でも1867年創立のハワード大学は，学問中心の大学として有名であり，1868年創立のハンプトン学院は，実学中心の専門学校として有名である (Taylor, 1993：840)。

17 共和党政権下の南部再建期には，文字通り人種を越えた普通教育を意味したが，その後，人種別学を前提とした普通教育へと修正されていった。

18 地元アラバマ州のいわゆる「黒人地帯 (the Black Belt)」では，1875年を境に民主党の巻き返しが始まっており，黒人政治家や官僚は次々に役職を追われていった。その結果，1875年アラバマ憲法には，学校教育における人種隔離規定と公教育の指導・意志決定を白人の手に委ねるとする規定が記載されることになった。その後，黒人教育はさらに劣等処遇を受けることとなる。

19 パルマーは年間報告のなかで，まず，アラバマ州が他州と同水準の公教育を提供するためには，教育予算の増加が必要であると述べた上で，現状の教育費支出のあり方に対して問題点を指摘した。その一つは，黒人地帯の黒人は，ほとんど税金を支払わないに

も係わらず，当該地域の教育予算のほとんどを消化していること，今一つは，黒人子弟は，白人子弟より知能が劣っているにも係わらず，白人子弟と同じ教育予算を使うのは金の無駄遣いであることであった。これらの問題を解決するためには，地域（郡）の白人の手に教育予算を委ねることが必要であると彼は提案し，やがてそれが下院提案House Bill 504として州議会にかけられることになった。

20　ワシントンは，黒人学校教育を低下させるこの法律を非難し，黒人の教育環境を改善するために，彼の融和主義が許す範囲でさまざまな努力を試みた。例えば彼は，白人の学校改革主義者，特に南部で教育に携わる北部出身者に対して，農村部の黒人学校へ州予算が配分されるよう州政府に求めるよう呼びかけた。また1909年には，ノースキャロライナ州の郡教育委員長のチャールズ・クーン（白人）の協力を得て，同州では黒人の納税額が黒人への教育予算より上回っていることを書いたパンフレットを作成して流布した。しかしこのような宣伝活動は，黒人学校の状況を改善するには至らなかった(Anderson, 1990：58-59)。

21　1875年州憲法では，「すべての児童に平等な利益があるよう」教育予算を配分することが定められ，この法律成立までは，一人あたりの教育単価で予算が計上されていた。しかし，「正当な分配」原則下では，白人の主観的な「正当性」の主張が可能になった。しばしばそれは，白人と黒人の納税比率より多くの予算を白人学校に投入することに利用された。

22　発信人はジョージ・W・キャンベル以下2名の州学校主事。書簡には，ハンプトン学院教師か黒人教育に理解のある「白人」のうち適当な人物を校長に推挙してほしい旨が記されていた。

23　ワシントンは，250ドルをハンプトン学院の経理部長ジェームズ・マーシャルから個人的借財として借り受け，手付け金として支払った。残りも一年以内に支払う約束で購入したが，当初から資金の宛があったわけではない。しかし，結局彼は5ヶ月で借金を返した。

24　例えば，レンガ生産は，4度目の取り組みでやっと成功した。

25　2(3)参照。

26　「教育と労働の機会の同時提供」方式は，19世紀南部で黒人が教育を受ける事を可能にする唯一の方法であった。さらに「経済的自立」は「自由人」の生活の基本であるという，解放奴隷局長ハワード将軍の信念から，黒人教育の目標としても積極的に採用されていった。ワシントンにとっては，ハンプトン学院を修了できたのもその方式に助けられたからであって，当然の帰結として，タスキギ学院にもその方式を応用した。彼は，学院内に農場や工場を付設して学生に労働させ，学生の授業料や寮費を捻出させるとともに，学院施設拡大・充実の手段とした。

27　1904年からは，会議に付属して短期講習が行われるようになった。

28　1854年6月11日ヴァジニア州で生まれる。解放後家族とともに移住したオハイオ州でthe Albany Enterprise Academy（私立の黒人学校）を卒業。ミシシッピ，メンフィス(テネシー)など南部で教鞭をとった後，ハンプトン学院，州立フラミンガム師範学校(マサチューセッツ)で教育を受ける。白人のような肌の白さ，教育への情熱と優れた技量，北部と南部の両方を理解し，交友関係を持っていたことなどから，ワシントンよりもむしろ寄付集めには大きな役割を果たした。最初の妻死亡後，ワシントンと結婚するが，1889年病死。

29 デュボイスは，1899年アトランタ大学で "The Negro in Business" と題して会議を開催し，自らが Negro Business Men's League の準備委員となった。

30 1891年前後からルイスの意見をワシントンは真剣に考え始めたとされる。

31 会合の直前，ニューオーリンズ，ニューヨーク，アクロンで黒人暴動が起こった。

32 多くの実業家と同様彼自身も一代で身を起こした人間であり，タスキギ学院の経営は実業家そのものであった。ワシントンは，自分個人が所有する土地，建物の運用により毎月100ドル近くの収入を得ていたし，その他に投資もしていた。またレンガや家具販売などタスキギ学院の事業は膨大な収入を学院にもたらした。

33 1912年出版の *From The Man Farthest Down*（実は Robert E. Park 執筆）に，ワシントンの認識「groups of people who are much worse off than the Negro」が見られる。

34 奴隷解放前後から19世紀末にかけて,「奴隷解放＝アフリカ帰還」と考える黒人たちが，アフリカ，とりわけリベリアに移住した。白人の差別主義者の中には，黒人をアメリカから追い出すために，黒人のアフリカ帰還を推奨する者もいた。

35 環大西洋の黒人の共同戦線を意図する会議に何度も参加を求められながら，ワシントンは参加を拒否し続けてきた。

36 *Up from Slavery* は，出版されてまもなくアフリカ大陸内で使用されていた欧州言語や現地語に翻訳され，多くのアフリカ人に読まれた。また宣教団体によって，タスキギ方式の自助・実学教育が推奨された。John L. Dube（南アフリカ），James E.K. Aggrey（黄金海岸）など黒人宣教師によって，黒人の自立運動として，タスキギ方式の学校，地域開発が実施された。

引用文献

著書

Denton, Virginia Lantz. *Booker T. Washington and the Adult Education Movement.* Gainesville: University Press of Florida, 1993.

Foner, Eric and John A. Garray, eds. *The Reader's Companion to American History.* Boston: Houghton Mifflin, 1991.

Harlan, Louis R. *Booker T. Washington: The Making of a Black Leader, 1856-1901.* New York: Oxford University Press, 1972.

————. *Booker T. Washington: The Wizard of Tuskegee, 1901-1915.* New York: Oxford University Press, 1983.

————. *Booker T. Washington in perspective: essays of Louis R. Harlan/edited by Raymond Smock.* Jackson: The University Press of Mississippi, 1988.

Lowe, Gary R. and P. Nelson Reid. *The Professionalization of Poverty: Social Work and the Poor in the Twentieth Century.* New York: Aldine de Gruyter, 1999.

Mathews, Basil. *Booker T. Washington: Educator and Interracial Interpreter.* 1948：Reprint College Park, MD: McGrath, 1969.

Meier, August. *Negro Thought in America, 1880-1915: Racial Ideologies in the Age of Booker T. Washington.* 1963. Reprint. Ann Arbor: University of Michigan Press, 1966.

Spencer, Samuel R., Jr. *Booker T. Washington and the Negro's Place in American Life.* Boston: Little, Brown and Company, 1955.

Thornbrough, Emma Lou, eds. *Booker T. Washington.* Englewood Cliffs: Prentice-Hall, 1969.

Washington, Booker T. *The Future of the American Negro.* 1899. Reprint. New York: The New American Library, 1969.

————. *Up from Slavery.* New York: Doubleday, Page and Company, 1901.

————. *My Larger Education.* 1911. Reprint. Miami: Mnemosyne Publishing, 1969.

Washington, Booker T., N.B. Wood, and Fannie Barrier Williams. *A New Negro for a New Century.* New York: Arno Press, 1969.

White, John. *Black Leadership in America: From Booker T. Washington to Jesse Jackson.* Second Edition. London and New York: Longman, 1991.

論文・記事

Anderson, James D. "Black Rural Communities and the Struggle for Education During the Age of Booker T. Washington, 1877-1915." *PJE. Peabody Journal of Education.* 67 (Summer 1990) : 46-62.

Bruce, Dickson D. "Booker T. Washington's *The Man Farthest Down* and the Transformation of Race." *Mississippi Quarterly.* 48 (Spring 1995) : 239-253.

Burton, Orville Vernon. "Sectional Conflict, Civil War, and Reconstruction." In Mary Kupiec Cayton, Elliott J. Gorn and Peter W. Williams eds. *Encyclopedia of American Social History.* New York: Charles Scribner's Sons, 1993.

Erhagbe, Edward O. "African-Americans and the Defense of African State Against European Imperial Conquest: Booker T. Washington's Diplomatic Efforts to Guarantee Liberia's Independence 1907-1911." *African Studies Review.* 39 (April 1996) : 55-65.

Fairclough, Adam. ""Being in the Field of Education and Also Being a Negro... Seems... Tragic": Black Teachers in the Jim Crow South." *Journal of American History.* 87 (June 2000) : 65-91.

Ferguson, Karen J. "Caught in "No Man's Land": The Negro Cooperative Demonstration Service and the Ideology of Booker T. Washington." *Agricultural History.* 72 (Winter 1998) : 33-54.

Frantz, Nevin R., Jr. "The Contributions of Booker T. Washington and W. E. B. DuBois in the Development of Vocational Education." *Journal of Industrial Teacher Education.* 34 (Summer 1997) : 87-91.

Jones, Allen W. "The Role of Tuskegee Institute in the Education of Black Farmers." *Journal of Negro History.* 60 (April 1975) : 252-267.

————. "Thomas M. Campbell: Black Agricultural Leader of the New South." *Agricultural History.* 53 (January 1979) : 42-59.

Jones, Evora W. "Booker T. Washington as Pastoralist: Authenticating the Man at Century's Ende." *CLA Journal.* 43 (September 1999) : 38-53.

Kilson, Martin. "The Washington and Du Bois Leadership Paradigms Reconsidered." *Annals of American Academy of Political & Social Science.* 568 (March 2000) : 298-313.

McElroy, Frederick L. "Booker T. Washington as Literary Tricker." *Southern Folklore.* 49 (1992) : 89-107.

Miller, Jan. "Annotated Bibliography of the Washington-Du Bois Controversy." *Journal of Black Studies.* 25 (December 1994) : 250-272.

Parmet, Robert D. "Schools for the Freedmen." *Negro History Bulletin.* 34 (1971) : 128-132.

Steel, Shelby. "Booker T. Washington Was Right." *New Perspectives Quarterly.* 7 (Fall 1990) : 23-25.

Trotter, Joe W. "Reflections on the African American Experience, Social History, and the Resurgence of Conservatism in American Society." *Journal of Social History.* 29 Supplement (1995) : 85-90.

West, Michael O. "Tuskegee model of Development of Africa: Another Dimension of the African/African-American Connection." *Diplomatic History.* 16 (Summer 1992) : 371-387.

Woodman, Harold D. "Class, Race, Politics, and the Modernization of the Postbellum South." *The Journal of Southern History.* 63 (February 1997) : 3-22.